

〈寄稿〉

四國五郎の絵に出会って

シベリア抑留・ヒロシマ原爆・ベトナム戦争―反戦平和貫く

栃尾 紀子（絵手紙作家）

「わが青春の記録」絵日記で

四國五郎展は2019年4月26日
～7月20日にかけて大阪大学総合学術



豊中市にある大阪大学総合学術博物館で3
か月に渡って開かれた四國五郎展

博物館において行われた。

少し明かりをおとした館内には、ひきしまった雰囲気があった。シベリアからの絵、ヒロシマの原爆、ベトナム戦時下の絵はそれぞれすばらしい。四國の絵を初めて知ったが、なぜ有名でないのだろうか、もっと知らせていいのではないかと考えた。印象にのこったのは「母子」の絵でベトナム戦下で殺されたわが子を抱く母の怒りの表現に強く胸がうたれた。

日記帳のようなものが入口に置いてあった。シベリア抑留生活・原爆日記の厚さ3cm幅の貴重なノートが「わが青春の記録」として展示されていた。思わずパラパラとめくるとすべてのページが絵日記で書かれているのに驚いた。すばらしい。ゆっくり見たい衝動にかきたてられた。



シベリア抑留時代の備品（飯盒や靴など）

後ほど講演会で知ったことだが、シベリアから帰国するとき、くつの底につめこんで見つからないよう持ち帰ったとか。もし見つければ命すらない、そんな厳しい状態であることを聞いた。

また、原爆日記は、弟が広島で被爆死、兄としての悲しい思いで広島のみずみずみ歩いて記録したとされていた。

四國五郎は何のために絵を描き詩をかき、日記を残したのか。息子の四國光さん（62）が木内みどりさんと対談した中でも、「父は絵一つとして売らなかつた。自身が命絶えても、絵は残り語りつづけられる」と言っただけらしい。

戦争というあつれきに負けず、強い意思で平和の尊さを描いたのだらう。今の時代に大いに励ましになる思いがする。

四國五郎は1924年の広島生まれ、2014年に亡くなっている。20歳で徴兵され、関東軍に配属されすぐ敗戦、3年間シベリアへ抑留された。シベリアで重病におか



『絵本おこりじぞう』の表紙

峠三吉『原爆詩集』の表紙や見返しの絵も四國五郎が描いた



峠三吉の肖像画（中央）



『絵本おこりじぞう』の朗読をした女優の木内みどりさん

6月22日、豊中市立文化芸術センターで開かれた「四國五郎と『絵本おこりじぞう』講演と朗読」



れ、病院に運ばれて命からがら帰国したとある。彼の絵画の中でシベリアへ連行される絵がものすごい重圧感で描かれている。

広島原爆によるスラム街が川辺にビッシリと並んでいる絵もすごい。戦争への怒りと悲慘と平和への訴えが色濃く感じる。私は四國五郎の絵画に、涙がつまってあふれるほど感じた。それは悲しみの涙でなく感動の涙だ。

戦争を起こす「本当に悪い奴」

四國五郎は挿絵を提供し、峠三吉とともに反戦平和運動を行っていた。また、NHKの原爆体験画に率先して応募し、参加をよびかけ2000通の絵の募集に成功、今では4000通におよび、広島原爆資料館に収められている。

豊中市の「文化芸術センター」では、講演と対談、女優の木内みどりさんの『絵本おこりじぞう』の朗読があった。『おこりじぞう』は、原

爆におかされ被服を剥ぎとられ、ボロギレをまとった少女が、おじぞうさんに水、水をとって助けられ、母とまちがえていられるように空にのぼって消えていく物語である。この絵を描いたのが四國五郎、文章は民主文学会の山口勇子さんである。

木内さんはこの朗読を何回もおこない、平和運動に参加しているとのこと。四國光さんは彼女の朗読にほれ、朗読が始まると目の前が風景化し、演劇を見ている雰囲気につつまれる、と感想をのべている。私もサークルで朗読を楽しんでいるが、見のがせない絵本である。木内さんは、どこへでも参じて朗読しますよと言っていた。これはいい、ぜひ来てほしいものである。

最後に、脳裏に焼き付く言葉がある。四國五郎がわが子に言い聞かす言葉を長男の光さんから得た。一度だけ自身や妹さんが叱られたことがあるという。

「つまらんことで怒るな。世の中に本当に悪い奴がおる。戦争をおこすやつ。それに対して本気で怒れ。戦争はあつという間にやってくる。選挙で『戦争をしない政府』を自分たちで選ぶとるしかない」と。